

令和 3 年 5 月 16 日現在

機関番号：33912

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02394

研究課題名(和文) 学際的手法による中・近世日本のサルファーラッシュ・シルバーラッシュの比較総合研究

研究課題名(英文) East Asian Distribution of Japanese Sulfur and Silver in the 14th-17th Centuries

研究代表者

鹿毛 敏夫 (Kage, Toshio)

名古屋学院大学・国際文化学部・教授

研究者番号：60413853

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,500,000円

研究成果の概要(和文)：15～17世紀の日本で盛んに採掘が進み、遣明船や朱印船、中国人ジャンク、あるいは南蛮船に積み込んで東アジア諸国に大量に輸出した鉱物資源に「硫黄(サルファー)」と「銀(シルバー)」がある。本研究では、これまで個別分野の枠内で研究者個々の方針と目的によって進められてきた「硫黄と銀のアジア的流通構造の究明」を、人文学・理化学の枠を取り払って学際的に組織したチームとして推進し、相互に連携と比較を繰り返しながら、その大量産出に沸いた中世～近世初期日本の「サルファーラッシュ」「シルバーラッシュ」の社会実態を明確化した。また、日本史の学際的共同研究の成果を世界的にも発信し、日本史研究の国際化に寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一連の研究によって、一見全く性質が異なり比較の対象にはなりえないと思える硫黄と銀が、人間社会がその発展のために依拠した地球上の鉱物資源という視点から見ると、歴史的に極めて類似・共通性の高い物質である実態が明らかになった。両鉱物は、古代からの採掘の歴史を有し、特に、日本の室町・戦国期から近世初頭にかけての時期には、アジアからヨーロッパまでつながるグローバル経済の波に乗って輸出入され、時の政治権力(室町幕府、守護大名、戦国大名、豊臣政権、江戸幕府)を支える重要な経済基盤になったと言える。

研究成果の概要(英文)：The investigation of the Asian distribution structure of sulfur and silver has been carried out according to the policies and objectives of individual researchers. In the 15th and 17th centuries, sulfur and silver were exported in large quantities from Japan to East Asian countries.

In this study, we clarified the reality of sulfur and silver distribution in Asia by an interdisciplinary team.

We also contributed to the internationalization of Japanese history research by disseminating the results of Japanese history research worldwide.

研究分野：日本中世史

キーワード：硫黄 銀 流通 学際研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景 従来の研究で明らかになっている硫黄・銀の流通史

15・16世紀の環シナ海域では、明、朝鮮、日本、琉球、そして東南アジアの国々の人々により、人的・物的に活発な対外接触が行われていた。東アジア諸国は明の皇帝との冊封関係によって政治的に結び付き、その体制のもとで朝貢形式の貿易システムからなる国家間の外交関係を確立させた。日明間を例とすれば、勘合貿易と称される合法的な貿易の形態がそれに該当する。この勘合貿易における日本から中国への最大の輸出品が硫黄（サルファー）である。文明15（1483）年の遣明船に際し足利義尚は九州の守護大名大友政親に硫黄上納を命じ、また、寛正6（1465）年の遣明船に積載された4万斤の硫黄が豊後の大友・薩摩の島津両氏によって門司・博多で調納されたことは、文献史料に記録されている。明への硫黄の進貢は、15世紀以降の遣明船のほとんどの回で行われているが、その起源は征西將軍懐良親王の遣使にさかのぼり、天授5（1379）年に「馬及刀、甲、硫黄等物」が献上されている。すでに、研究代表者鹿毛敏夫の分析により、幕府からの輸出用硫黄の上納命令を受けた大友氏は、14世紀後半期に九州豊後国内（大分県）の硫黄産地とその搬出地の支配を点から線へと拡大していき、更に「春日丸」等の大型船を利用して瀬戸内海各港へ輸送する海上ルートも確立していたことが明らかになっている。また、研究分担者の伊藤幸司は、国内の硫黄産地に使節を頻りに派遣して、重要輸出品である硫黄鉱石を確実に確保しようとする室町幕府の流通政策を考察している。一方、研究分担者の山内晋次は、10～16世紀のアジアにおける硫黄の国際流通構造の推移を考察してきた。その結果、10～13世紀では中国に向けて火薬原料としての硫黄が集中的に流入したのに対して、14～16世紀になると、中国を含めた複数の地域を流入の核とする多極的国際流通へと硫黄の流れが変化したことが明らかになった。山内はその後も、沖縄県硫黄島など南西諸島における旧硫黄産地や、中国温州における硫黄積載日本船の漂着記録などの現地調査を進め、アジアにおける硫黄の国際流通のなかでの日本の重要性に関わるデータを蒐集している。

一方、銀（シルバー）に関しては、世界遺産に登録された石見銀山を中心として、近年、その研究は著しい進展を見せた。なかでも、石見における16世紀前半からの銀の産出と流出が、日本海海域の様々な経済関係を大きく変化させ、巨大都市の出現と、そこに集散する膨大な物資を生み出して、中国地方内陸部を含めた地域社会全体に多大な影響を及ぼした実態が明らかになっている。16世紀から17世紀にかけての日本で起こった「シルバーラッシュ」とも言えるこの経済現象は、銀を国際通貨とする東アジアの貿易構造に大きな影響を及ぼし、戦国から豊臣・徳川政権へと変化する日本社会は、東アジア貿易でつながる周辺国との国際関係に連動しながら、劇的な変化を遂げた。

(2) これまでの研究の問題点と本共同研究開始のきっかけ

前述のように、中・近世日本の主要輸出品であった硫黄と銀をめぐる研究は、特に2000年代に入って文献史学の研究者による分析調査が進展した。ただし、その取り組みは、硫黄や銀に対する個人研究に終始し、成果を相互に持ち寄って議論する領域には達していない弱みがあった。そうしたなか、2013年1月、本共同研究のきっかけとなる働きかけが人文学とは異なる分野から起こった。本研究の研究協力者溝田智俊は、分析化学の立場から長年にわたり歴史時代産の黒色火薬（硫黄・硝石）の原料産地の特定を、軽元素の安定同位体比をトレーサー解析することで追究してきた。16世紀に九州豊後産硫黄が大阪の堺に流通していたとする鹿毛の文献史料分析結果を知り、堺環濠都市遺跡から出土した壺に充填されていた硫黄の同位体比分析を実施した。その結果、同硫黄は、九州豊後の伽藍岳産出の硫黄と同位体比が一致することが判明した。この重大な結果の一致をきっかけに、従来個別に実施していた硫黄研究を、文献史学・分析化学・考古学を総合した学際的共同研究に発展させ、更に、ともに主要鉱物資源として中・近世日本の社会構造に大きな影響を及ぼしながら、これまで並べてその社会的機能が評されることのなかった硫黄と銀を、東アジア全体の国際的社会構造のなかで比較考察しようとする提案が鹿毛からなされ、本プロジェクトを開始することとなった。

2. 研究の目的

15～17世紀の日本で盛んに採掘が進み、遣明船や朱印船、中国人ジャンク、あるいは南蛮船に積み込んで東アジア諸国に大量に輸出した鉱物資源の、「硫黄（サルファー）」と「銀（シルバー）」本研究の目的は、これまで個別分野の枠内で研究者個々の方針と目的によって進められてきた「硫黄と銀のアジア的流通構造の究明」を、人文学・理化学の枠を取り払って学際的に組織したチームとして推進し、相互に連携と比較を繰り返しながら、その大量産出に沸いた中世～近世初期日本の「サルファーラッシュ」「シルバーラッシュ」の社会実態を明確化することにある。また、日本史の学際的共同研究の成果を、国内のみでなく世界的にも発信し、日本史研究の国際化に寄与することにもある。

また、従来の火器研究は鉄砲史が中心であり、その技術的構造や、武器としての伝播・拡大という問題に関心が集中していた。火器に不可欠な火薬の原料である硫黄や硝石を、いかに安定的かつ大量に確保するかという問題関心に基づいた歴史学的研究はこれまでほとんどなされていない。本研究は、歴史学におけるこのような研究史の空白を埋めるという意義も持っている。

硫黄と銀は、物理学的には一見全く異なる性質の鉱物に思えるが、前近代社会においては、鉱山におけるその採掘から「山子」ら人夫による運搬、不純物を取り除く精錬、問屋を介した販売・輸送にいたる基本的工程は同一である。「サルファーラッシュ」「シルバーラッシュ」と称される

その大量生産は、当該日本社会に新たなビジネスを発生させたと推測される。例えば、硫黄産地の豊後で16～17世紀に活動する「計屋（はかりや）」（硫黄や銀の計量を生業とする商人）は、文献史料を博捜することで薩摩や石見など他の産地でも当然存在していたことを立証できると推測する。そこで明らかになる中・近世日本の産業構造が、東アジア全体の貿易構造にどのような形で結びついていたかを総合的に考察することで、蛸壺的研究と揶揄されがちな日本史研究の成果を学際的かつ国際的なステージに遡上させることも目的の一つに置いた。

3. 研究の方法

本研究の遂行は、人文学と理化学を融合させた学際的共同研究体制によって推進する必要があるため、研究代表者に加えて、研究分担者3名に加え、10名を超える多くの研究協力者による連携体制を組織した。また、研究内容が日本の枠を越えたアジアの広領域にまたがるため、海外調査や国際学会における英語発表を積極的に推進し、研究体制の国際化とその成果の世界的発信にも努めた。

研究ユニットは5分割した個別考察班を基本単位としたが、本研究では班相互の調査連携と分析結果の比較・総合を重視するため、全構成員による「重点共同調査」を適宜実施し、かつ、代表者は各ユニットの進捗状況の調整と全体統括に特に留意した。

本研究に携わる研究者の専門分野は、それぞれ、日本中世史、中国明清史、海域アジア史、金属材料分析化学、日本考古学、と全く異なっている。異分野の研究者が「硫黄・硝石・銀のアジア的流通とその産地の究明」という共通の目標のもとで学際連携した。

4年間におよぶ研究の方法および経過は、以下の通りである。

初年度は、まず6月に、第1回全体会議を開いてメンバーの問題認識の共有と年度詳細計画の策定を行った。そして7月に、チェンマイ（タイ）で開催のICAS（International Convention of Asia Scholars）10国際学会に参加し、本共同研究の問題認識と目的を英語にて国際的に発表した。具体的な調査・研究活動は、「硫黄」考察班・「銀」考察班・「硝石」考察班・「同位体比解析」班・「考古」班の各個別考察班に分かれて推進した。重点共同調査としては、7月にタイ北部およびラオスにおける硝石原料の系統的採取を行い、国内では2月に久能山東照宮博物館および香川県立ミュージアムにおいて17世紀初頭の残留火薬原料の調査等を実施した。

2年目も同様、研究ユニットは5分割した個別考察班を基本単位とした。「硫黄」考察班は、中・近世の国内産硫黄の生産と流通ルートの解明と、アジアの海域ルートに連なる国際的流通構造の解明をめざした。「銀」考察班は、中・近世の国内産銀の生産と流通ルートの解明、および東アジア～東南アジア海域における日本銀と新大陸銀の国際的流通構造の解明をめざした。また、世界の産銀地域における「計屋」等の関連生業発生の実態とそのメカニズムの分析を行った。

「硝石」考察班が考察する硝石については、その産地と流通に関してこれまでほとんど学術的解明がなされていない。そこで本研究では、11～18世紀の幅広い期間におけるアジアの火薬原料としての硝石の全体的流通状況の解明をめざした。「同位体比解析」班では、火薬原料の硝石と鉛がセットで輸入されたのではとの作業仮説を立てて、中国南部～東南アジア産硝石の標本蒐集を進めるとともに、国内産の硫黄と硝石についてもより幅広くデータ蒐集を進め、同位体比解析と理化学的考察を行った。「考古」班では、大分・島根・大阪の各教育委員会文化財課・博物館の考古学研究者を協力者として迎え、現地における遺物調査やデータ蒐集を行い、共同踏査を推進した。共同調査は、10月に島根、および2月にカンボジアで実施した。また、11月に硫黄の東アジア流通に関する中間成果報告会および全体会議を名古屋で開催し、特に中間成果報告の内容は一般公開した。

3年目も、5分割した個別考察班を基本単位とした研究ユニットをもとに調査・考察を進めた。また、班相互の調査連携と分析結果の比較・総合を重視するための「重点共同調査」も実施した。まず8月に、メキシコのグアナファトを訪ね、スペイン時代の銀鉱山遺跡と銀流通の痕跡を現地調査するとともに、プエブラ栄誉州立自治大学の研究者との共同研究会を開いて、本共同研究の目的・意義・現状を紹介した。また、9月には、「中・近世の硫黄史 豊後硫黄の産地と行方」と題した研究会・巡見を大分県九重町・由布市で開催し、博多遺跡における中世初頭の硫黄の出土状況や、17世紀東アジア海域での硫黄貿易についての研究報告と議論を行い、くじゅう硫黄山・塚原硫黄山（伽藍岳）の硫黄鉱山遺跡の現地調査、近世初頭の「硫黄運上銀」関係古文書の分析を実施した。研究の進展に伴って、研究協力者の数も増え、考察分野も多様化し、まさに学際研究の様相を呈してきたが、各ユニットの進捗状況の調整と全体統括には特に留意した。

そして、最終年度での成果集約を見据えた研究会議では、そのスケジュールを確定し、2020年夏までに代表者・分担者・協力者の計14名で研究成果および経過を文章化し、代表者がそれを集約して、論集『硫黄と銀の室町・戦国』（2021年3月、思文閣出版）として刊行した。論集は、

硫黄と銀の世界史、硫黄山・銀山の考古学、サルファーラッシュ・シルバーラッシュの産地と社会構造、の3部構成にまとめた。また、2021年3月には、その成果を一般向けに紹介する公開歴史シンポジウム「戦国大名と鉱物資源」を九州の地で開催した。

4. 研究成果

4年間の共同研究の成果を文章化した論集『硫黄と銀の室町・戦国』およびシンポジウムで披露した成果と課題の梗概は以下の通りである。

まず、考察は3部に分けて実施した。第1部では、2つの鉱物資源を世界史的観点から分析す

る「硫黄と銀の世界史」のステージを設け、硫黄と銀、および近代の金までを視野に入れたアジアから世界における流通・貿易・経済論を展開した。続く第2部では、日本国内における中・近世の両鉱山遺跡の考古学的研究の現状を整理する「硫黄山・銀山の考古学」のステージを置き、銀山遺跡の先進的な発掘調査・整備の事例から、硫黄遺物出土事例の速報的な紹介と化学分析、および硫黄産地の港の考察を行った。そして、第3部では、「サルファーラッシュ・シルバーラッシュの産地と社会構造」のステージを設定し、両鉱物資源の産地における生業の実態とその流通、生産地を支配下に置こうとする大名権力の動向、日本を含む東アジア海域における硝石・硫黄・鉛の貿易動向、そして硫黄から銀へと切り替わっていく産業構造の全体像を考究した。

一連の研究によって、一見全く性質が異なり比較の対象にはなりえないと思える硫黄と銀が、人間社会がその発展のために依拠した地球上の鉱物資源という視点から見ると、歴史的に極めて類似・共通性の高い物質である実態が明らかになった。両鉱物は、古代からの採掘の歴史を有し、特に、日本の室町・戦国期から近世初頭にかけての時期には、アジアからヨーロッパまでつながるグローバル経済の波に乗って輸出入され、時の政治権力（室町幕府、守護大名、戦国大名、豊臣政権、江戸幕府）を支える重要な経済基盤になった。

その後、19世紀アメリカ西海岸のゴールドラッシュに沸いた金産地が現代にはゴーストタウン化したように、かつてサルファーラッシュに沸いた九州の硫黄産地から人影が消えて火山噴火口からの噴煙と結晶硫黄のみが散在し、シルバーラッシュに沸いた銀産地でも間歩の洞穴のみが残されたと言える。

人間は、地球という惑星に生き、自らの生活および集団・社会をより豊かにするために、その一つの惑星の限りある生活圏のなかで、資源を探し当てて開発・活用し、産業を発展させながら、人類史を紡ぎあげてきた。「サルファーラッシュ」や「シルバーラッシュ」、そして「ゴールドラッシュ」などという言葉には、地球上の鉱物資源をめぐる、人間の一目あさましい欲望や奪い合いの姿が投影されるが、その一方で、過去を生きた人々のそうした営みの歴史を、「硫黄の世紀」「銀の世紀」「石炭の世紀」「石油の世紀」のように順序立てて整理することで、鉱物資源に依存してきた人類の歴史の大きな流れを理解し、限りあるそれらの資源を今後どう利活用して未来の社会を構築していくかという道標を立てることも可能となろう。

特に、本研究の論点の一つに、地球上の陸上域における「鉱物資源の偏在」の問題があった。銀に関しては、「新大陸」や日本での大量の埋蔵と生産の情報が伝わると、それらは瞬間にスペインやポルトガルの国家政策と結び付き、国際通貨と化して、中国をはじめとしたとした世界各地に流通した。硫黄に関しても、世界経済が一体化される以前の地域的国際社会のなかで、重要な軍需品としての性格を伴って、鉛や硝石等とともに輸出入が繰り返された。

世界史におけるこうした資源の偏在を要因とする歴史掌握の考え方は、これまで見過ごされがちであったが、列島各地で群雄が割拠した室町・戦国期の日本社会の分析においても有効な論理となろう。硫黄をふんだんに産出する九州地方に室町期とその前後の時期を一貫する長期的な大名権力が成長・持続し、やがて戦国末期の銀の時代になると、その有力産地を有する中国地方の大名権力がそれらを凌駕する。一方、四国地方では、硫黄も良質な銀産地もないため、経済的に潤った大規模かつ長期政権的な大名が育ちにくかった。さらに、東海・中部以東から東北・北海道にかけての東日本は、硫黄はふんだんにあるものの、その輸出貿易を行うための国際的環境が室町期までは組織化されていないという、地政学的要素に制約されており、また、戦国期になると金鉱山の開発が進んで大名権力の重要財源となるものの、鉱物そのものが有する稀少性のために、銀のような国際的に流通する貨幣にはならなかった。

決して単一・均質ではない日本列島の政治・経済的力学の動向を、このような「鉱物資源の偏在」と、それを要因とした、人間による競合・奪取・独占の歴史として分析した時、世界史ないしは人類史と有機的につながる共時性を見つけ、周辺アジア諸国の歴史や世界全体の歴史文脈と共鳴できる日本史像をイメージできるように思う。

すでに20世紀来の「石油の世紀」を謳歌してきた私たちに、その前世紀の「石炭」からの恩恵の記憶が薄れたように、「石炭の世紀」の産業革命に邁進した人々も、その前世紀の「銀」がもたらした世界通貨としての意義を見失っていった。同様に、16世紀後半以降の「銀の世紀」に世界経済の一体化を担った人々も、その直前の火器（鉄砲等）の時代に広く流通した「硫黄」や「鉛」の軍需品としての価値を忘れ去っていった。

ともに現代社会における貨幣や火器としての利用価値を喪失した鉱物資源であるが、かつて銀の採掘に沸いた銀山跡が、鉱脈に沿う坑道（間歩）の痕跡を遺跡として残しやすいのに対して、火口生成した鉱石を表面採掘する硫黄山跡の場合は、遺構が形ある産業遺産としては極めて残りにくい。また、双方の鉱山町についても、坑夫や銀吹師（精錬師）等の分業化された多数の専門鉱業従事者が町に長期間住み着いて消費生活を行った銀山町に対して、硫黄山町の方は、火口の硫黄鉱石を「山子」がはぎ取って中継基地「計屋」まで運び、粗雑な道具を使って手作業で不純物を除去し製品化する単純な採鉱・運搬・精錬作業である。そのため、硫黄山町には、必ずしも専門職人が常時住み込んで生活する必要がなく、生活痕を残す町遺構を残しにくい。さらに、室町期日本の硫黄鉱業は、国内需要に対応する恒常的採鉱を維持しつつも、幕府や大寺社、諸大名による遣明船の進貢物の調達期にのみ急激に需要が高まる特徴を有している。本研究での比較分析により明らかになってきた「硫黄産業」と「銀産業」の歴史におけるこうした相違点については、さらに再検討し、それぞれの鉱物に依拠した人間社会の歴史の実態の解明に努めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計26件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 山内晋次 | 4. 巻 7 |
| 2. 論文標題 「海を渡る硫黄 14-16世紀前半の東アジア海域」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『中国社会研究叢書21世紀「大国」の実態と展望』 | 6. 最初と最後の頁 121-155 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 伊藤幸司 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「アジアのなかの港市博多」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『港津と権力』 | 6. 最初と最後の頁 29-49 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 中島楽章 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「鄭和の記憶 ポルトガル人のインド到達と中国情報」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『東アジア海域から眺望する世界史 ネットワークと海域』 | 6. 最初と最後の頁 157-193 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 Nakajima Gakusho | 4. 巻 52-1 |
| 2. 論文標題 “ The East Asian War and Trade between Kyushu and Southeast Asia in the Late Sixteenth Century: Centered on Kato Kiyomasa ' s Trade with Luzon ” | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 Chinese Studies in History | 6. 最初と最後の頁 23-41 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 佐伯徳哉 | 4. 巻 395 |
| 2. 論文標題 「鎌倉時代伊予国支配の構図と地域」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『伊豫史談』 | 6. 最初と最後の頁 13-23 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 鹿毛敏夫 | 4. 巻 38 |
| 2. 論文標題 「九州における水軍の活動と戦国大名の「海城」政策 上野家文書と丹生島城」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『城郭史研究』 | 6. 最初と最後の頁 3-15 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 鹿毛敏夫 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「守護大名大友親繁の館」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『戦国大名大友氏の館と権力』 | 6. 最初と最後の頁 10-29 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 鹿毛敏夫 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「大友氏研究の軌跡と論点」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『戦国大名大友氏の館と権力』 | 6. 最初と最後の頁 1-8 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 鹿毛敏夫 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「戦国大名のインフラ整備事業と夫役動員論理」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『戦国大名の土木事業 中世日本の「インフラ」整備』 | 6. 最初と最後の頁 251-273 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 中島楽章 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「一七世紀の全般的危機と東アジア」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『グローバル化の世界史』 | 6. 最初と最後の頁 121-146 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 伊藤幸司 | 4. 巻 180 |
| 2. 論文標題 「港町複合体としての中世博多湾と箱崎」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『九州史学』 | 6. 最初と最後の頁 33-66 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 伊藤幸司 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「南北朝・室町期、島津氏の「明・朝鮮外交」の実態とは？」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『中世島津氏研究の最前線』 | 6. 最初と最後の頁 101-118 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 山内晋次 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Japanese Sulfur and East Asia during the 11-16th Centuries | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Proceedings of The 1st British-East Asian Conference of Historians, Core and Periphery in British and East Asian Histories | 6. 最初と最後の頁 293-302 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 鹿毛敏夫 | 4. 巻 14 |
| 2. 論文標題 「西国大名領国比較研究の方向性 大内と大友」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『博多研究会誌』 | 6. 最初と最後の頁 51-57 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 鹿毛敏夫 | 4. 巻 19 |
| 2. 論文標題 「16世紀日本とアジアのつながり 戦国大名と豪商のアジア進出」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『地歴最新資料』 | 6. 最初と最後の頁 3-7 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 中島楽章 | 4. 巻 28 |
| 2. 論文標題 「十六世紀末朝鮮戦争与九州 東南亜貿易：以加藤清正的呂宋貿易為中心」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『明代研究』 | 6. 最初と最後の頁 89-119 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 中島楽章 | 4. 巻 10 |
| 2. 論文標題 「16世紀中期の東亞海域与火器伝播」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『海洋史研究』 | 6. 最初と最後の頁 198-224 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 中島楽章 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「清代徽州の山林経営、紛争、宗族形成 祁門凌氏文書的研究」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『徽州宗族研究訳文集』 | 6. 最初と最後の頁 98-145 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 中島楽章 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「16世紀中期の馬六甲与華人海商」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『海客瀛洲 伝統中国沿岸城市与近代東亞海上世界』 | 6. 最初と最後の頁 389-397 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 伊藤幸司 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「入明記 遣明使に不可欠な外交故実書」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『史料で読み解く日本史 中世日記の世界』 | 6. 最初と最後の頁 352-363 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 伊藤幸司 | 4. 巻 77 |
| 2. 論文標題 「日本における前近代東アジア交流史の現状と課題」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『民族文化研究』 | 6. 最初と最後の頁 359-380 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Mizota, C., Hosono, T., Matsunaga, M., Okumura, A. | 4. 巻 625 |
| 2. 論文標題 「Dual (oxygen and nitrogen) isotopic characterization of the museum archived nitrates from the United States of America, South Africa and Australia」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『Science of the Total Environment』 | 6. 最初と最後の頁 627-632 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 佐伯徳哉 | 4. 巻 228 |
| 2. 論文標題 「地域史からみた権門体制の可能性 出雲地域史からの試み」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『歴史科学』 | 6. 最初と最後の頁 19-32 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 佐伯徳哉 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 「平安末期藤原摂関家の石見知行国支配と対馬海域」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『島根県古代文化センター研究論集』 | 6. 最初と最後の頁 13-21 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 山内晋次 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「日本産硫黄がつなぐ東部ユーラシア史」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『知っておきたい歴史の新常識』 | 6. 最初と最後の頁 70-73 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 山内晋次 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 「東アジア海域世界と日本」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『日本古代交流史入門』 | 6. 最初と最後の頁 191-206 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計30件（うち招待講演 15件 / うち国際学会 14件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 山内晋次 |
| 2. 発表標題 「対馬島・濟州島のミカンと女真の馬 中華としての高麗」 |
| 3. 学会等名 北大史学会特別例会「国際シンポジウム：濟州島をめぐる東アジア海域交流史」（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 山内晋次 |
| 2. 発表標題 「「硫黄の道」研究をめぐる諸問題」 |
| 3. 学会等名 広島史学研究会大会・東洋史部会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|----------------------------|
| 1. 発表者名 岡美穂子 |
| 2. 発表標題 「世界史の中の石見銀山」 |
| 3. 学会等名 島根県世界遺産講座（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Nakajima Gakusho |
| 2. 発表標題 “Relations between Ryukyu Kingdom and the Melaka Sultanate from the mid-15th to Early 16th Century: Mainly from Rekidai Hoan” |
| 3. 学会等名 Conference, Melaka in the Long 15th Century（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中島楽章 |
| 2. 発表標題 「龍腦之路：15-16世紀琉球王国香料貿易の一箇側面」 |
| 3. 学会等名 “大航海時代珠江口湾区与太平洋 印度洋海域交流” 国際學術研討会（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中島楽章 |
| 2. 発表標題 「15-16世紀、東アジア海域の龍腦貿易 琉球王国の香葉貿易と朝鮮」 |
| 3. 学会等名 International Conference, A Look at East Asian History through Transnational Intercourse and Networks（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 鹿毛敏夫 |
| 2. 発表標題 「大友宗麟と豊後府内」の最新研究」 |
| 3. 学会等名 第10回大分県議会政策勉強会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--------------------------|
| 1. 発表者名 鹿毛敏夫 |
| 2. 発表標題 「世界史のなかの戦国大名」 |
| 3. 学会等名 菟野町歴史講座（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名 鹿毛敏夫 |
| 2. 発表標題 「『豊後若林家文書』の修正翻刻と総合比較」 |
| 3. 学会等名 九州史学会大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|----------------------------|
| 1. 発表者名 鹿毛敏夫 |
| 2. 発表標題 「九州の水軍とその活動・築城」 |
| 3. 学会等名 日本城郭史学会大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中島楽章 |
| 2. 発表標題 「16世紀中期的東亜航線与琉球群島 《日本一鑑》与Lopo Homen 東亜図の比較検討 」 |
| 3. 学会等名 2018海洋史国際学術研討会（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中島楽章 |
| 2. 発表標題 「龍腦の道 一五・一六世紀の琉球王国と龍腦貿易 」 |
| 3. 学会等名 国際シンポジウム「近世期東アジア地域における医師の国際移動や学術交流 医学関係の筆談記録を中心に 」（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Nakajima Gakusho |
| 2. 発表標題 “Munition Trade between Japan and Maritime Asia before and after the Invasion of Korea ” |
| 3. 学会等名 4th Asian Association of World Historians Congress（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中島楽章 |
| 2. 発表標題 「レキオスを求めて ポルトガル人の琉球探索と情報収集 」 |
| 3. 学会等名 シンポジウム「アジアの海を渡る人々 16・17世紀の渡海者」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 伊藤幸司 |
| 2. 発表標題 「アジアのなかの国際貿易都市博多」 |
| 3. 学会等名 日本都市学会大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 山内晋次 |
| 2. 発表標題 アジアをつなぐ「硫黄の道」 |
| 3. 学会等名 第63回国際東方学会議（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Yamauchi Shinji |
| 2. 発表標題 Japanese Sulfur and East Asia during the 11-16th Centurie |
| 3. 学会等名 The 1st British-East Asian Conference of Historians: Core and Periphery in British and East Asian Histories（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 山内晋次 |
| 2. 発表標題 硫黄流通からみた11-16世紀の日本とアジア |
| 3. 学会等名 中世史研究会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 山内晋次 |
| 2. 発表標題 硫黄流通からみた11-16世紀の日本とアジア |
| 3. 学会等名 高麗大学校歴史教育科・海外学者招請講演会（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 鹿毛敏夫 |
| 2. 発表標題 「Diplomatic relations and trade of military supplies between Western Japan and Southeast Asia in the 1570's」 |
| 3. 学会等名 The Tenth International Convention of Asia Scholars（タイ・チェンマイ）（国際学会） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 鹿毛敏夫 |
| 2. 発表標題 「16世紀日本の戦国大名権力とイエズス会・中国明朝 その相互認識」 |
| 3. 学会等名 「宗教と民族の対立・交流の現代歴史学的研究」共同研究会（名古屋学院大学） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 鹿毛敏夫 |
| 2. 発表標題 「中世武家館の展開 豊後大友氏の守護館と大名館」 |
| 3. 学会等名 中世史研究会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 鹿毛敏夫 |
| 2. 発表標題 「戦国大名のインフラ整備事業と夫役動員論理」 |
| 3. 学会等名 織豊期研究会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中島栄章 |
| 2. 発表標題 「Maritime Trade of Saltpeter in East and Southeast Asia during the late 16th Century」 |
| 3. 学会等名 The Tenth International Convention of Asia Scholars (タイ・チェンマイ) (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 伊藤幸司 |
| 2. 発表標題 「日本における前近代東アジア交流史の現状と課題」 |
| 3. 学会等名 第一屆海洋論壇「海洋文明與東亞發展」(中国・青島)(招待講演)(国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 溝田智俊 |
| 2. 発表標題 「Towards further understanding for historic gunpowder trading system in view from the stable isotopic approach」 |
| 3. 学会等名 The Tenth International Convention of Asia Scholars (タイ・チェンマイ) (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 佐伯徳哉 |
| 2. 発表標題 「鎌倉期伊予国の支配について 出雲地域史との比較から」 |
| 3. 学会等名 伊予史談会（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山内晋次 |
| 2. 発表標題 「海を渡る硫黄 14～16世紀の日本・琉球・朝鮮・明」 |
| 3. 学会等名 北大史学会例会ミニ・シンポジウム |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 山内晋次 |
| 2. 発表標題 「14-16世紀東アジア海域における硫黄流通」 |
| 3. 学会等名 九州史学会大会日本史部会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 山内晋次 |
| 2. 発表標題 「11-16世紀海域アジアにおける硫黄流通」 |
| 3. 学会等名 琉球・沖縄歴史研究会例会 |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計7件

| | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 伊藤幸司 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 勉誠出版 | 5. 総ページ数 418 |
| 3. 書名 『室町戦国日本の覇者 大内氏の世界をさぐる』 | |

| | |
|--------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 佐伯徳哉 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 同成社 | 5. 総ページ数 272 |
| 3. 書名 『権門体制下の出雲と荘園支配』 | |

| | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名 鹿毛敏夫 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 勉誠出版 | 5. 総ページ数 348 |
| 3. 書名 『戦国大名の海外交易』 | |

| | |
|----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 佐伯徳哉 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 吉川弘文館 | 5. 総ページ数 336 |
| 3. 書名 『出雲の中世 地域と国家のはざま』 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 佐伯徳哉・長谷川博史・山崎裕二・岡宏三・廣澤将城・永瀬節治 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 今井出版 | 5. 総ページ数 211 |
| 3. 書名 『出雲大社門前町の発展と住人の生活』 | |

| | |
|-----------------------|-----------------|
| 1. 著者名 鹿毛敏夫 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 思文閣出版 | 5. 総ページ数 400 |
| 3. 書名 『硫黄と銀の室町・戦国』 | |

| | |
|-------------------|-----------------|
| 1. 著者名 鹿毛 敏夫 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 360 |
| 3. 書名 『大友義鎮』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 伊藤 幸司 (Ito Koji) (30364128) | 九州大学・比較社会文化研究院・教授 (17102) | |
| 研究分担者 | 山内 晋次 (Yamauchi Shinji) (20403024) | 神戸女子大学・文学部・教授 (34511) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------------------|---|---|----|
| 研究 分 担 者 | 中島 楽章 (Nakajima Gakusho) (10332850) | 九州大学・人文科学研究院・准教授 (17102) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

| | |
|---|--------------------|
| 国際研究集会 Reunion con Investigadores-Historiadores Japoneses(Puebla,Mexico) | 開催年 2019年～2019年 |
| 国際研究集会 Japan in the Sengoku Period and Asian Trading Networks of Military Supplies | 開催年 2017年～2017年 |

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|--------------|--------------|--|--|--|
| その他の国・地域（台湾） | 台湾国家海洋研究院 | | | |
| メキシコ | プエブラ荣誉州立自治大学 | | | |